

学科　こどもの生活学科	所感 引き続き、各学生の長い将来を見据えた教育を心掛けたい。				
氏名　宮武　里衣					
家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa 型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。					
イ　ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。					
ロ　管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療・健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。					
ハ　こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。					
1　教育の責任					
家政学部こどもの生活学科への着任は 2022 年である。国語教育や教職関係を中心に担当している。内訳は小学校教諭と幼稚園教諭、保育士資格取得に関わる科目である。担当科目のうち、4 科目は上級学年対象であるが、2 科目の卒業必修科目は 1 年生対象である。1 年生科目については、高校からのスムーズな大学教育への接続を担う役割が求められている。また、上級学年の科目については、卒業後に小学校教諭、幼稚園教諭、保育士として即戦力として働ける力をつけ、広い視野をもち、子どもやその家庭への正しい視点を身に付けさせることが大切と考えている。シラバスは添付資料 1 である。	科目名	学科	開講期	受講者数	備考
	国語科（含む書写）研究	こどもの生活	1 年前期（2024）	36	卒業必修
	国語科教育法	こどもの生活	1 年後期（2024）	37	卒業必修
	エクスターンⅠ	こどもの生活	2 年前期（2024）	18	小学校教諭選択科目
	こども文化	こどもの生活	4 年前期（2024）	38	保育士選択選択科目
	こども文学	こどもの生活	3 年後期（2024）	41	幼稚園教諭選択科目
	卒業論文	こどもの生活	4 年通年（2024）	4	卒業必修
	未来へつなぐアウトリーチⅠ	全学科	1 年通年（2024）	15	卒業必修
	未来へつなぐアウトリーチスタートアップ	全学科	1 年通年（2024）	15	卒業必修
2　教育の理念と目的					
教員採用試験や保育士の受験者減少が話題になって何年も経っているが、抜本的な対策がないままゆっくりと減少は進んでいる。その一方で、寿命が長くなった現代では、老年期までを精神的に豊かに過ごすために、幼児・児童期の教育が重要であるということに社会が気付き始めている。　その中で、本学のこどもの生活学科の社会的使命は従前に増して高まっている。特に、社会で求められる指導者になるために次の四つが必要だと考えている。一つ目は子どもの成長のために心を砕いて行動しようという意欲、二つ目は子どもの成長を見据えて今必要なことを教えられる知識、三つ目は子どもと家庭の問題を包括的に受け止められる視野の広さ、四つ目は同僚と協働する力である。大学在学中に、それらをバランスよく身に付けて卒業させることが本学こどもの生活学科に奉職するものとしての使命と考えている。					
3　教育方法					
主に　1 年生を担当していることから、大学での学びの方法と姿勢を修得させるとともに、教育に携わるものとしての基礎的な知識を獲得させることが大切と考えている。知識の獲得については、授業の冒頭に前時の復習を、また授業の終わりには本時のまとめの時間をそれぞれ保証している。まとめについては、一コマの授業を俯瞰して構造化できるようなノート取り方を、各講義の初回で指導している。加えて、授業内容の理解を問うために、複数回に 1 回の小テストを実施して、自己採点により自己の学修を振り返る機会をもっている。					
授業での学びの活用としては、「模擬授業」や「物語作成」などの演習の機会を後半に準備している。特に、小学校教諭の養成科目では、グループワークを主体とした発表型の課題として、前述「2 教育の理念と目的」で示した協働する力の伸張を促している。問を立てて、それを解決する流れになるような課題を提示している。問の解決は、高等教育の学びの基本であると考えているからである。					
4　授業改善の活動					
学生からのフィードバックは、授業アンケートと各学期に行うレポートや課題である。授業アンケートでは評点評価となるため、学びの内容についての客観的な意見が表出しにくいと思われる。そのため、アンケートだけで判断せず、学生から提出されたレポートや課題の完成度を自分の講義への評価と捉えて、次の年度に生かすようにしている。　特に国語科教育については、時代とともに教育現場の課題は変容するので、最新を理解できるように、所属している国語教育関係の三つの学会には毎年必ず参加、できれば発表するようにしている。また、体感として教育現場の課題を即時に把握できるように、ここ数年は小学校での「言葉に関する出前授業」を行っている。2024 年度も 2022 年度から引き続き、岡崎市立六ッ美北部小学校で学生と共に行った。加えて、要請があれば小学校現職教員研修の講師や研究会の助言者を受け、今年度は 2 回の講演・助言を行った。読み聞かせや図書館の利用についての内容である。					
5　学生の授業評価					
2024 年度の学生の授業評価アンケートは添付資料のとおりである（添付資料 2）。項目 1 の評価が高かったのは、学生主体の授業を心掛けてきた効果の表れだと考えている。「国語科教育法」の模擬授業についてはアンケートには書かれていないものの、苦労している様子が見えられた。学年配当が 1 年生であるため 2 年から始まる「エクスターン」などの実習型科目が役に立たないことは申し訳ない。その他の科目については学生の満足度も高いので、現在の授業内容に大きな問題点はないものと受け止めている。今後も、わかる授業、考える授業、解決できる授業の 3 点を目標に、内容と方法をさらに検討し続けたい。					
6　学生の学修成果					
科目「国語科研究」と「国語科教育法」では、学習指導要領の内容を理解したうえで、児童の実態に合わせた指導案を作成できるようになることが目的であった。最終的にはほとんどの学生が学習指導要領の内容を理解して、視点をもって教材解釈を行い、模擬授業を実施することできていた。教具の内容や授業技術は今後の成長を期待したい。（添付資料 3）。					
7　授業科目に関連した教材開発					

授業者としては、スライド内容の精選とを心掛けた。映像や画像を多用し、児童の実態や時代背景については教育現場の様子をスムーズに理解できるように配慮した。古い時代の教科書や資料はなるべく現物に触れられるように準備した。難しい場合は、国立国会図書館のデジタル資料を多用した。また、朗読や読み聞かせなどの聞くことに関しての指導内容については、プロの録音を利用して、わかりやすい授業になるように心掛けた。
また、発表のツールとしては、パワーポイントに頼らずに教育現場で指導者として使い方がわかるように、壁新聞を作成させた。
8 指導力向上のための取り組み
愛知学泉大学家政学部が主催する FD 研修会で教育改善のヒントを得たり、学会や研究会に参加して国語科教育の最新の情報を取得したりしている。また学生の読解力を正確に把握して適正な語彙を使った授業ができるように、独自にリーディングスキルテストの簡易版での調査を行って、本学学生の読む力の課題を明らかにしている。学生の課題に見合った授業方法になるように工夫を続けているつもりである。
9 今後の目標
当面の指導目標としては公立小学校教員採用試験の合格者を輩出することである。授業としては「エクスターン」で具体的な指導を続けるとともに、頻繁な面談によって、意識の低下や混乱がないよう学生のサポートに努めたい。
また、小学校の教員としては、国語科に関して、ある程度の専門性をもたせられるように、確かな教材解釈力を高めたい。また、保育士や幼稚園教諭としては、児童文学の歴史を理解したうえで、幅広い児童文化財から児童に合った教材を提供できるような見識を身に付けさせたい。
10 添付資料
添付資料 1「シラバス」、添付資料 2「授業評価アンケート」、添付資料 3「授業で作成された国語科指導案」